

大学は学生を輝かせ、地域と地球を元気にする人材として送り出すことができるかを問う

地域を生きし・地域にいかされる大学教育をやまぐちの地から

- 1)2010年1月7日
- 2)山口市仁保
- 3)安溪遊地BS
- 4)安溪遊地

学校は誰のためになんのためにある制度なのかという原点の問いをいつも忘れずに

学生の顔が輝くような教室にするための工夫と苦勞の向こうに「わくわく」がある

地域と大学が接する時の基本的なつきあいを学んでそれを踏まえる

既存の大学という組織への「異議申し立て」として「もうひとつの大学」を模索し続ける

誰が来るか、何が起ころか予測がつかない教室のわくわくを大切に

地域と丁寧に接することと学生を地域に連れ出すことが矛盾しないように気をつける

それなら地域に何をしてくれるんですか？という問いに答える研究と教育が必要な場面も

大学時代の3人の恩師それぞれの熱中に学んだことが基礎になっている

多彩な客員で「いつもの教員のいつもの話」の限界を破る努力

地域に出て行く大学教員の夢と落とし穴

「ひと仕事を大切にす
る」プロジェクト主義
モードの科学から
モードの科学へ

「寝たきり大学2年生」を起こした水野アリスネウス先生のラテン語熟中コースの力

地域の人々が教室にきてくれるように仕掛けをする 誰が生徒か先生かをめざして

異文化からの知人友人に授業にでももらう 西表・アフリカ・パキスタン・韓国

昇進社会では、ほとんどのポストを無能に達した人々が占めるピーターの法則

屋久島の研究と保全から環境教育へ。「屋久島フィードワーク講座」の10年

幼稚園と大学院でしか教えられないだろうと言われた伊谷純一郎先生の教育

オムニバス授業をわくわくするものにする試み

教育論の衝突 同僚どうしが教室で演じる「デスマッチ」

違う専門の教員たちがひとつのテーマで熱く語るオムニバス講義の魅力

たくさんのボランティア団体に参加して時には深入りしてしまう

動き出したら止まらないアクセル係と断乎としたブレーキ役が家の2馬力の秘密

地方の小さな大学にしかできない挑戦を模索する

小さな花でいいから与えられた条件を生きし切って「その向こう」をめざす

シューマッハーの Small is beautiful. をめざしつつ Small can be ugly. を忘れず

学園紛争の問いかけに職を辞して移動大学運動に取り組んだ川喜田二郎先生と若者たち

主役は学生。大教室でも一人ひとりが主人公であることを実感できるように準備する

プロの教職員集団づくりという異質の統合の大切さとむずかしさ

さまざまな大きさの教室それぞれの工夫が必要

超マスプロ教育からマンツーマンに近い教育まで フランスでの1年半で学んだこと

教員たちを集めたオムニバス講義の前には自己紹介的研究会をするようにしてきた

300人クラスでの授業から研究室での修士論文の指導までを経験してきた

プロ集団を束ねる方法 高木善之さんの「オーケストラ指揮法」

寝た子を起こすために教室でオカリナを吹いたりする

学生からの声を授業の中でフィードバックすることが教室の一体感を生む

教員も学生も地域の生活者として学びあうことができるはずだ

地域という学校で身体も心も頭も使って深く学ぶ

現場に立って身体で覚えたことを実感をもって伝える

教室から出て身体を使って学んだことは心にも深く入りこむ

手と身体を動かして学ぶ 分別ゴミ箱づくりの2年半から「エコチャリ」へ

自然の中で、自分の感性を解放する 田んぼの生き物調査から実践的アニミズムまで

生活者として自らを鍛える 家造りと田んぼづくりから学ぶ

教室を飛び出して「学びの場」を地域に広げる

ミニフィールドワーク 金も時間もかけず気軽に学生とおでかけする

学生たちと地域おこしのお手伝いに出かける 達人塾とスローツーリズム

学内のリサイクルサークルにかかわって古紙の値段から知る世界経済の最前線

たかが学校じゃないか「不登校したら人生終わり」じゃないよ

Universityから生命系の宇宙に学ぶCosmosityへ ケニアで見た夢